亭子院賜酒記

中納言長谷雄卿

延喜十一年歳次二辛未一夏六月十五日太上法皇開二水閣一排二風亭一別喚二大戸一賜以二醇酒一蓋禪觀之暇法慮之餘遣二避暑之情一助二送閑之趣一也然應二其選者一唯參議藤原仲平兵部大輔源嗣右近衛少將藤原兼茂藤原後蔭出羽守藤原經邦兵部少輔良峯遠視左兵衛佐藤原伊衡散位平希世八人而已并皆當時無雙名号甚高雖二飲酒一及レ石如レ以レ水洒レ汝者也爰有二勅命一限二二十盃一盃内點二墨定一其痕際不レ增不レ減深淺平均逓各称雄任レ口而飲及二六七巡一滿座酩酊不レ道二

寒温不知東西數称見風起居不靜其尤甚者希世
偃臥門外次亦極者仲平歐註殿上其餘我而非我
泥之又泥也或竟消心迷尸居不驚或古結語矣鳥
轉難辨至如経邦者初雖示快飲意氣湯湯終事反
寫窮聲喧喧繞不乳者伊衡一人殊有抽賞賜一駿
馬一支止十盃不更復酌于時光景漸暮堂歌數奏各
各纏頭倒載而歸有一病臣不飲獨醒具見行走
筆記之嗟乎始聞其名皆謂伯倫再生猶難相抗至見
其實即雖病尪半死厭幾可及古之取謂羊公鶴者
諸君之喻歟

酒食論

吏我君乃代主おさめ民をあくまでひれふしまで
もと漢家は明王聖主なれども高のなれ
ゐすゑまでも酒ひたすらに本朝もそんさ
天暦もこと也ましてや
まことに民のかまどもあまたかくのごとくなれば
あまたかくのごとくなるものゆゑ
こゑのこゑにそて実は二人ぶんをも
かねよりもこのくすりをくにするもてゐる
ふたり乃男は造酒丞槽屋胡盲長持ごとく酒